

* ゴーチェ子午環の目盛環読み取りマイクロメータ

ゴーチェ子午環は任務を終えて久しい。1903年フランスで製作され、1904年(明治37年)日本に到着した。しかし、その頃、日露戦争(1904年(明治37年)2月6日 - 1905年(明治38年)9月5日)が勃発していた。当時、東京天文台は麻布区飯倉の地にあった。その敷地は2500坪あったが、900坪は急な斜面であり、狭隘であり、ゴーチェ子午環を展開できなかった。当時、東京天文台はその狭隘な敷地、明るくなった市街地から北多摩郡三鷹村への移転が計画されており、明治42年(1909年)には三鷹村に敷地を購入することが出来ている。しかし、日露戦争で莫大な戦費を使い、国力は疲弊しており、三鷹村への移転は容易には進まなかった。明治43年(1910年)には、購入後7年経っても梱包状態のゴーチェ子午環は会計検査院から不要不急の高価な買い物とお叱りを受けている。

三鷹の地にゴーチェ子午環のための建物が建設されたのは大正13年(1924年)のことである。当時の面影を残す写真1を元子午線部の辻光之助氏のご遺族からいただいた。

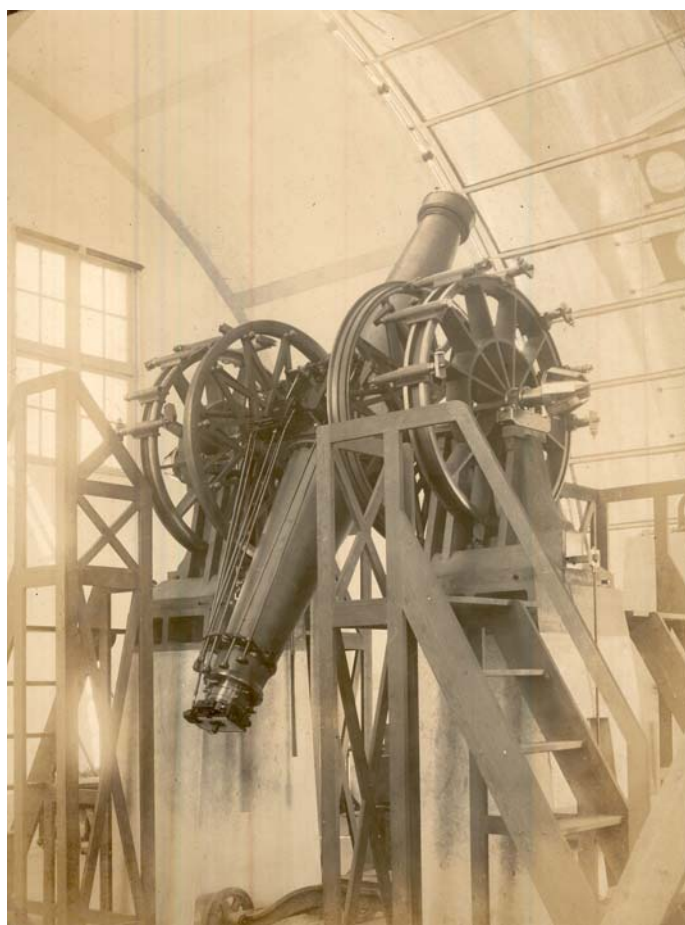


写真1 ゴーチェ子午環の古い写真

国立天文台歴史館（65cm屈折望遠鏡ドーム）の1階の展示ケースにゴーチェ子午環の第1世代の接眼部（マイクロメータ）が展示してあり、その脇に小さなマイクロメータ（写真2）を展示していた。実は、この小さいマイクロメータの素性を知らないことが気になっていた。素性を知らないまま、このマイクロメータを調べたところ、今までで一番立派な楔形の波形とクモ糸の十字線（写真3）が見えたのである。

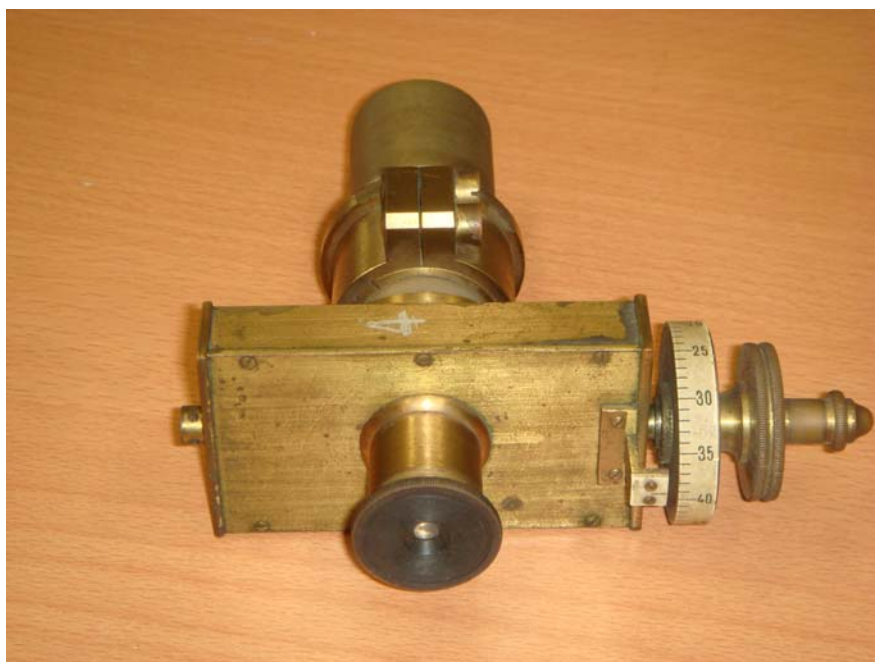


写真2 ゴーチェ子午環接眼部と一緒に展示されていたマイクロメータ

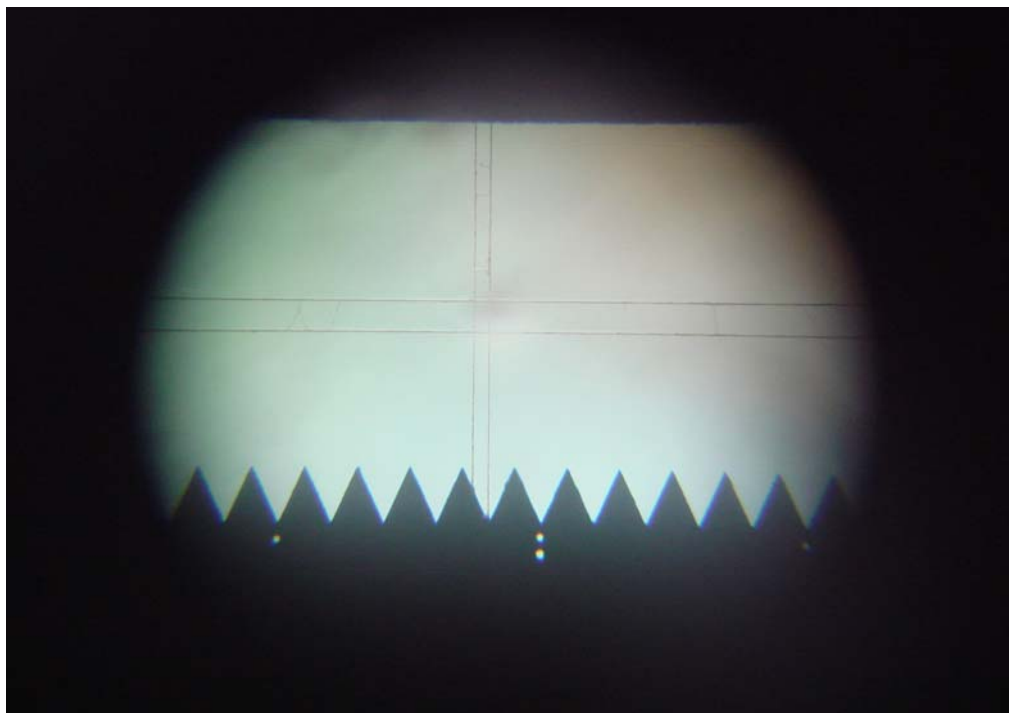


写真3 マイクロメータの視野に見える波形と十字線

歴史館に展示した第1世代のゴーチェ子午環の接眼部は、当時の東京天文台の一般公開時に、この接眼部を覗けるようにした展示に使われていた。この小さいマイクロメータもその展示の脇にあった記憶がある。そこで、これはひょっとしたら、ゴーチェ子午環の目盛環読み取り用マイクロメータではないかと気がついた。

そこでさっそく、検証に行った。ゴーチェ子午環のその使命を終わるころには、目盛環の読み取りは4箇所を設置された長尺フィルムを使ったカメラが設置(写真4)されていた。

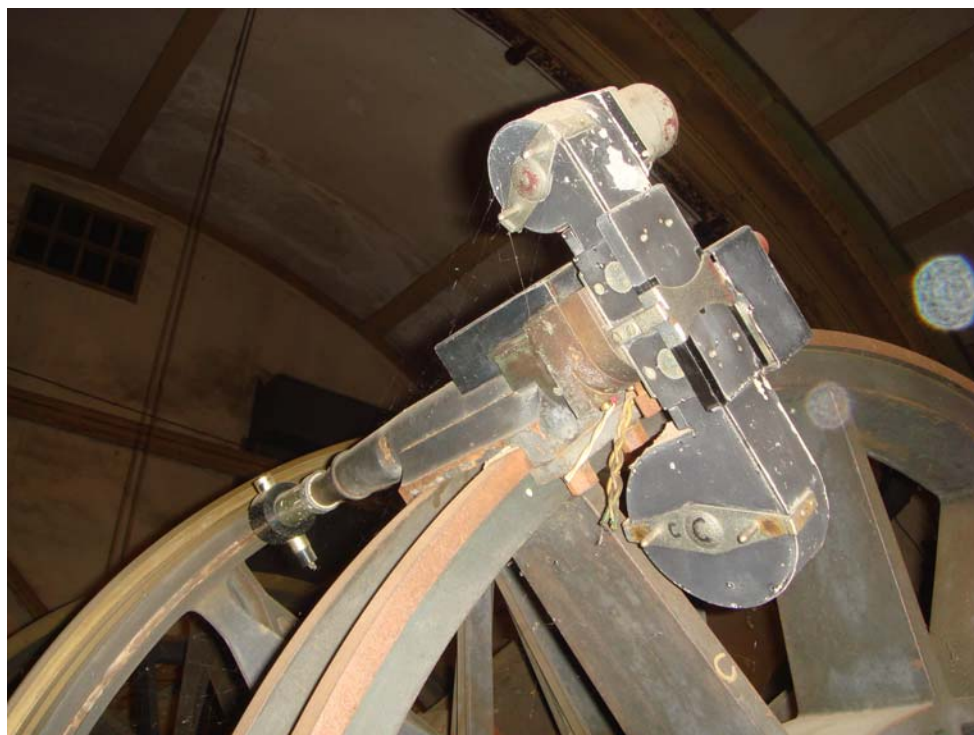


写真4 目盛環読み取り用の長尺フィルムカメラ



写真5

建設当時の写真1を見ると、目盛環読み取りの顕微鏡には、この小さいマイクロメータ(写真5)が着いているのではないかと。

そして、現在は、長尺カメラがついている目盛環の反対側の目盛環には、写真5のようなマイクロメータ(写真6)があった。



写真6 今もあったマイクロメータ

これで、気になっていた疑問が一つ解決した。

写真7は、現在、常時公開コースでいつでも見られるゴーチェ子午環である。



写真7 現在のゴーチェ子午環の姿